

第2回田畑実戯曲賞 選考経過と選評

〈選考経過〉 田辺剛(劇作家)

第2回田畑実戯曲賞の最終選考会は2019年7月2日に人間座スタジオで行われた。今回の応募は58作品と昨年より大幅に増えた。審査は昨年と同様に人間座の菱井喜美子、劇作家の田辺剛、演出家の山口浩章によって行われた。

まず、全作品を読んだなかから受賞に推す作品、あるいは議論の俎上に載せるべき作品を三人それぞれが挙げるところから始まった。一人でも挙げる作品があればそれについて議論をすることとして17作品が議論の対象となり、それら一作品ずつ話し合いを重ねてさらに以下の9作品に絞り込まれた。作家の五十音順で、刈馬カオス『猫がない』、北島淳『たちぎれ線香売りの少女』、タナカマナミ『葦』、豊島照久『うなぎを食べたい河童』、長尾ジョージ『光陰矢の如し、浮かべよ少年』、中村大地『ここは出口ではない』、西尾佳織『わたしたちの家』、平井寛人『雨のパ！ 一踊る子猫と幽恋』、吉村健三『靴を失くして』。

休憩を挟んで投票を行って最終選考作品を選ぶこととした。上位四作品は『たちぎれ線香売りの少女』、『うなぎを食べたい河童』、『ここは出口ではない』、『靴を失くして』だった。菱井は『光陰矢の如し、浮かべよ少年』について、作劇の技術が優れていて大人のためのエンターテインメント作品として成立していると高く評価しこだわりを見せたが最終候補としては外されることとなった。

田辺が今回は受賞作として積極的に推せるものがなく「該当なし」ではどうかと提案したが、菱井はむしろ一作に絞り込むのが難しく受賞作を二作出せないかと、山口は今年の候補作の方が良いものが多かったと認めるものの「該当なし」には同意せず、受賞作を出すこととなった。

最終候補作のなかで議論が伯仲したのは『ここは出口ではない』と『うなぎを食べたい河童』だった。前者については菱井山口両氏の解釈論議が盛り上がった。菱井が複雑につながる人間関係が巧みに描かれていると高く評価し受賞作として推した。山口も生と死や個人の境界も曖昧になっているところが魅力と語った。田辺は会話が漫然と続く印象が強くそもそも議論の対象から外されてよいと考えていたが二人の解釈論議を聞いて自分には気がつかなかった魅力があるのかもしれないと認めた。後者については山口が登場人物の言動や物語の構成の支離滅裂さが衝撃的だったと発言、その不条理な内容やセリフ運びも合わせて高く評価し受賞作として推した。田辺もまったく先の読めない展開に惹きつけられあまりの不条理さに今回の候補作のなかで唯一笑ったと評価した。一方菱井は筆力の高さは認めるもののその世界観は受け入れがたいと難色を示した。

『たちぎれ線香売りの少女』については、原案となる童話や落語と対峙しながらしっかりとした構造の不条理作品を作ったという良い評価とその構造を型にはまっているとする消極的な評価があった。『靴を失くして』については、認知症の老人を描くのに片方の靴がなくされているというアイデアが評価され菱井は上演すると面白いだろうと評した。

菱井は『ここは出口ではない』と『たちぎれ線香売りの少女』の同時受賞を提案したが他二人の同意は得られず、一方『うなぎを食べたい河童』が選に漏れるのは受け入れられないと山口。ただ菱井は『うなぎを食べたい河童』の受賞には反対し田辺も同調した。それからも議論は続き、最終的に『ここは出口ではない』を受賞作とし『うなぎを食べたい河童』を佳作とすることで合意した。昨年からの応募数が増えたこともあるが議論もまた白熱したものになったのが印象深かった。

〈講評〉田辺剛(劇作家)

豊島照久さんの『うなぎを食べたい河童』では、ガンを患い余命いくばくもない男や夫に暴力を受ける女が放火を企てる。その人物の描写は追い詰められ苦悩するようなものではなく、そうすることがごく自然な成り行きであるかのように淡々とあるいは堂々としている。人物らに届けられる特上うなぎや「自己責任」というキーワード、観客には見えない少女などさまざまな題材が練りこまれているその物語は不条理な構成と支離滅裂なセリフによって貫かれている。そうして作品を描き切った作家の筆力に感嘆した。先の読めない展開に笑いつつ惹きつけられた。ただ、追い詰められた人々の抗うさまを不条理かつコミカルに描こうとする意図は実現されたと思うけれど、その果てに読者がどこかに連れていかれたのかと言うと頼りない。作品から何かしらのイメージを読者のなかに想起させるには題材が多すぎたのかもしれない。また、確かにセリフの支離滅裂さは魅力ではあるけれど、それは素朴に粗いということと紙一重のところ成り立っていて、さらに洗練されるとこの劇世界独特の匂いをもっとはつきりするのだろう。そうした点から受賞には積極的に賛成しなかったが佳作が設けられたのは良かったと思う。

中村大地さんの『ここは出口ではない』は、ところどころ失われている登場人物の記憶や閉まっているコンビニなど何か少し欠けている世界の一晩の物語だが、死者と生きる者の境界線や人間関係の距離を取り払ってみれば漫然とした会話が続くほかないように思われた。居合わせた者らが不条理な夢の再現を試みるころでは独特な匂いの空気が生まれて場が動きそうで惹きつけられたが、それは朝の到来とともに消えていく。劇世界全体の曖昧さがわたしにはそれほど魅力があるように感じられなかった。ただ、選考会の場でお二人の活発な解釈論議を聞いて受賞には反対しなかった。

刈馬カオスさんの『猫がない』の村や地下室という場所の設定、北島淳さんの『たちぎれ線香売りの少女』における独特な物語の確かさ、西尾佳織さんの『わたしたちの家』における不在の者へ向けられた眼差し、タナカマナミさんの『葦』が喚起する川の風景、平井寛人さんの『雨のパ！ 一踊る子猫と幽恋』の圧倒するテキストの分量と濃密な劇世界、そして吉村健三さんの『靴を失くして』では失われた片方の靴というアイデアから認知症の老人を描こうとする目論見など、それぞれの作品にハッとさせられるところはあって、そうした点で候補作の彩りは豊かに思われたが、いずれもその魅力が持続しなかったり小

さくまとまってしまうのが残念だった。

〈講評〉 山口浩章(演出家)

昨年に引き続き、劇作家の田辺剛さんと共に人間座の田畑実戯曲賞の選考をさせていただくこととなりました。応募作品数は昨年の 34 作品から 58 作品と増え、賞の立ち上げから関わらせていただいた身としては嬉しく思い、応募して下さった皆様には、この場を借りて、敬意と感謝をお伝えしたいと思います。

受賞作品に選ばれたのは、中村大地さんの『ここは出口ではない』で、タイトルからはサルトルの『出口なし』を想起させるが、この作品も 4 人の登場人物による、「死」をテーマにした話である。とは言っても、ぎすぎすした感じや、地獄のような雰囲気ではなく、どちらかという、登場人物 A と B のごく普通の穏やかな日常生活のように始まる。そこへ話題となっている死者 C が普通に訪ねて来て、会話する。はじめこそ訪ねられた方は疑問を持つが、会話も飲食も触れもする死者と、当たり前のように話していく。「生」と「死」の境界線が取り払われたような世界で会話は進む。途中帰れなくなったもう一人の人物 D が A の家に泊まることになるが、そこもさしたる抵抗もなく会話に入っていく。一見すると始発が動き出すまでの、無意味なお喋りのようだが、A の記憶はなぜ頻繁に失われるのか、原因不明の停電はなんなのか、実は最初から「コンビニがやってない」という異常は提示されていて、物語世界がいびつに歪んでいるような、終末と現世の境界線のような雰囲気がずっと漂っている作品でした。

受賞には至りませんでした。応募作品の中でひときわ目を引いたのが、豊島照久さんの『うなぎを食べたい河童』でした。独特の文体を持った作品で、時空間が入り乱れたり、登場人物の特異性や、観客からは見えないみゆきやウェイトレスの存在など一読しただけでは解き明かせない演劇言語がちりばめられているが、会話のコミカルさや、不思議なアンバランスさに惹きつけられる作品で、どうしても何もなしでは済まされないと「佳作」という賞を急ぎょ作っていただきました。

北島淳さんの「たちぎれ線香売りの少女」は曖昧な時空間の曖昧さそのものが魅力な作品。彼岸と此岸をにおわせながら、どこへ行くともない。女 1 と 2 は男 1 の妻娘かなど想像力を喚起させられる要素も多く、会話そのもののリズムがよく、飽きさせず魅せる力がある作品でした。

上記三作品はどの作品も魅力的で、審査員の中でも意見の分かれる所でした。その他に吉村健三さんの『靴を失くして』、池上泰三さんの『九月の動物たち』、タナカマナミさんの『葦』、殿井歩さんの『ユートピアたより』、平井寛人さんの『雨のパ！ー踊る子猫と幽恋』はそれぞれ特筆すべき作品でした。

最後に、応募していただいたすべての作家の皆さんに御礼申し上げますとともに、今後のご活躍をお祈り申し上げます。